産経ニュース

閉じる

2017.12.31 14:00

【古典個展】新年号を「天成」とするのも一案かと思う年の暮れ　大阪大名誉教授・加地伸行

今日は大晦日（おおみそか）、今年も暮れる。この1年、さまざまなことが起こり、しかしそれらは静かに歴史の中に納まってゆく。

そして人々の記憶に残ってゆくものは、印象的なことばである。まずその第一は「忖度（そんたく）」（推察・推量）であろう。

「忖度」は、『詩経』巧言の「他人　心有り。予（よ）　之（これ）を忖度す」から来たことばであるが、いつのまにやら〈黙って便宜を図（はか）る〉といった暗い意味として使われてしまっている。

そういう愚劣な理解の暗さと違って、藤井聡太四段が将棋公式戦50勝達成のときの感想中、「節目」を「せつもく」と音読みしたことで、世間は明るく騒いだ。ふつうは「ふしめ」と読むのに、藤井四段は人間が違うとはしゃいだのが世間。

しかし、『礼記（らいき）』学記に「善（よ）く問う（研究熱心な）者（もの）は…その易（やす）き者（問題解決しやすいところ）を先（さき）にし、その節目（せつもく）（難しいところ）を後（あと）にす」とあり、われわれ漢文屋は、当然、「節目（せつもく）」と音読するぞよ。

因（ちな）みに「節目（せつもく）」には、（1）木目（もくめ）がまっすぐでそろっているのを目（もく）（正目（まさめ）・柾目（まさめ））、木目が曲がったり円形のものを節（ふし）と呼び、その両方を指す。（2）正目でないもの。という2種の意味あり。

このように、中国古典の中にあることばが、現代に甦（よみがえ）って使われるのは、漢文屋にとって嬉（うれ）しくありがたいこと。

別（わ）けても、来年中に新元号が発表されるだろうが、どういう典雅（てんが）なことばが中国古典から選ばれるのか、楽しみである。

西暦はキリスト生誕年とする年から数えるキリスト教暦であり、老生のような仏教徒とは縁がない。もちろん、ユダヤ教徒にはユダヤ暦、イスラム教徒にはイスラム暦がある。

中国大陸の共産国は、キリスト教を国教としたのか?　西暦を正式としているが、台湾では清に代わった中華民国成立時から数える民国暦を使っている。

わが国は、独自の年号を使って今日に至っている。しかし国会中継を見ていると、議員の大半、与野党も時には閣僚までもが、例えば（西暦）2017年度と称しているが、そのような年度は法的に存在しない。

正しくは平成29年度である。

この「平成」は、年号を慶応（明治のすぐ前代）に改めたとき、候補の1つであったが採用されなかった（森本角蔵著『日本年号大観』）という。

「平成」の出典は、『易経』繫辞（けいじ）上・『書経』大禹謨（たいうぼ）・『春秋左氏伝』宣公四年の三者に亘（わた）っているが、同じくこの三者の同じ句に基づいて「天成」という候補が康平・嘉保・元亨・元禄・永保・元応・慶応に決定時に7回も出されている（前書）という。

日本は、昭和天皇から今上天皇へと激動の時代を乗り切ったが、新天皇即位後、今上天皇は上皇として在（いま）されるのであるから、さらにその精神の継続という意味を含めて、新年号を「天成」とするのも一案かと部外者ながら思う年の暮（くれ）である。

『書経』畢命（ひつめい）に曰（いわ）く、辞（ことば）は体要（たいよう）（十分で簡潔）を尚（たっと）（尊）び、異（い）を好むを惟（おも）わざれ、と。　（かじ　のぶゆき）

©2017 The Sankei Shimbun & SANKEI DIGITAL All rights reserved.